

## はじめに

スギのさし木によるコンテナ苗生産は、さし穂を土にさし付けて一定期間管理し、十分に発根した頃にコンテナへ移植して育苗する方法や培土を入れたコンテナ容器に直接さし穂をさし付けて発根・育苗する方法で行われています。また、穂木を発根させる過程を土などの基質を使わず、特定の環境条件下で散水することによってさし穂を発根させる「エアざし」で実施することも可能です。

どのような方法でさし木苗を生産するにしてもさし穂が必要です。さし穂の供給源は、造林地などからのいわゆる山取りや穂木を生産することを目的として造成した採穂園が古くから活用されてきました。造林が盛んに行われ苗木の生産量が多かった時代と比べると、国有林の苗畑で利用されていた採穂園なども廃止され、県や民間の採穂園の数や面積も減少しています。しかしながら、近年の人工林資源の充実とその活用及び資源の平準化を目的とした伐採・再造林の推進により、九州地域では県や認定特定増殖事業者等による特定母樹指定システムを用いた採穂園の再造成、または新規の造成が行われています。

ここでは九州育種場において原種園の植栽木を採穂台木として育成する際に実施している仕立て方の事例や初期の樹高成長が優れた第二世代精英樹（エリートツリー）を仕立てる際の注意点などを「九州育種場におけるスギ採穂台木の仕立て方」としてご紹介いたします。